

トップ > スペシャルインタビュー > 水谷孝次さん

インタビュー スペシャルインタビュー



デザイン事務所を設立され、ポスターやパッケージのグラフィックデザインを中心に活躍する傍ら、「笑顔のコミュニケーション」を実現するMerry Projectを運営されています。水谷氏の原動力、そして夢とは？
Mリープロジェクト http://www.21merry.net/

水谷孝次さん

第6回 Mリープロジェクト 水谷 孝次×S.T.E.P.22

何かを変えたい、良くしたい

S.T.E.P.22:
本日はお忙しい中、お時間をとっていただきありがとうございます。

水谷氏:
どうぞよろしくお願ひいたします。

S.T.E.P.22:
水谷さんは、現在デザイン事務所を設立され、ポスターやパッケージのグラフィックデザインを中心に活躍されていますが、これはやはり学生の頃からの夢だったのですか？

水谷氏:
確かに小さい頃から、絵を描くのは好きでした。男の子だけで集まっても、外で遊ぶよりは、みんなで絵を描いているような、そんな子供でした。でも僕は大学時代には全く違う勉強をして、実際には電子工学をやっていました。デザインとは関係ないですよね。非常に大きなズレがあったのです。実際に、電子工学を学びながら、何をやるのも楽しくなくて、失敗ばかり。この分野は自分に向いていない、ということだけはわかりましたね(笑)

S.T.E.P.22:
では学生の頃の水谷さんの夢とはどのようなものだったのでしょうか。

水谷氏:
そうですね。私が学生の頃というのは、70年安保の頃で、時代的には学生連も世界的に政治的なこととか社会的なことを学んだり考えたりした時代でした。政治の話をするところからファッションだった、みたいなね…。だから僕も将来について色々考えたことは考えましたよ。特に当時は自由な事か安定か、どちらをとるか、という時代だった。だから僕自身も、いい会社に入るのもいいけど、一方で大らかな人生が見えてくるような人生はつまらないかと漠然と思っていましたね。
だから、コガネムシプロジェクトという団体を作って歌を歌い、「歌で世の中を変えよう！保守的な街に行って、街の色を変えよう！」なんて言って活動していましたよ。指導教授から就職の薦めがあったのに、僕は安定を選ぶつもりはなくなり、「書を捨て町へ出よう」という香山修司の本の第一節のような人生を歩もうと思ったのです。とにかく、何かを変えたい、良くしたい、ということを常に考えていましたね。

デザインの世界

S.T.E.P.22:
歌を通してメッセージや、思いを伝える、情報を発進するという行為が水谷さんの原点になっているように思いますが、いかがでしょうか。

水谷氏:
そうですね。当時、私がやっていたコガネムシプロジェクトが、地元では非常に有名になってきて、マスコミに取りあげられることもしばしばありました。文化祭の時期には40校近い学校からオファーが来ることもありました。あるとき、2000人近い観客の前で歌うことになり、これまで自信がなかった私の中に、今までにない、強い何かが生えたと、歌い終わった後の万雷の拍手。その時、こういう風に「心を込めて」歌って、自分自身が無になり、自分の本当の「心」が伝わるのだという瞬間があったのです。ソートと水を打ったように会場が静まり、失敗しようがどうしようか、そんなことではなく自分の「心」を伝えることの大切さを正直に表現すれば、何千人であろうが、何万人であろうが、思いは伝わると実感しました。その瞬間から私は変わったのです。そしてとにかく好きな事をやりたい、と思いました。
人に何かを伝え、世の中を新しくするとき、良くする、とかっていう事(ロマ)を持ち、たとえお金がなくても、日々食べていくことさえできれば、それでいいのでは無いかと、思うようになりました。その結果、「安定と自由」なら「自由」を優先して思い、小さい頃から好きだった絵の世界へ進もう。そして絵(デザイン)を通じてメッセージを発進しよう、と思ったのです。

S.T.E.P.22:
その結果、デザインの世界へと歩みを進められたのですか？

水谷氏:
はい、そうです。でも、デザインについて何も学んだ経験もなければ、知識もない。だから、最初どうしたらいいかわからなかったですね。そこで、まずは東京の下町のデザイン会社で働き始めたのです。でもそこでの技術は古くて、もっと新しいものを学ばないかと思って、森沢(デザイン学校)の夜間を受験しました。でも一年目で一次試験は受かったものの、昼間働いていたアルバイトを、日中に行われた二次試験を受ける事ができなくて、それで翌年の入試まで準備して、アルバイトをしながら、もう一度試験を受けました。その間、ツッパンの練習として、お金もなかったので毎日何十枚と、自分の手のデザインをしていました。そして試験で「手の動作」という課題が出て、おかげさまで1位2位という成績で合格したのです。

S.T.E.P.22:
これには何か運命的なものを感じますね。

水谷氏:
僕のこれまでの人生はいつもそうなのですが、どんなことでピンチがあれば、チャンスはある。試練はあるし…人生はそういうものだし、不運があれば運がいいこともある。振り返ってみてもいつもそうなのです。デザインの基本がなかった私は、とにかく空き時間を見つけては自分の作品を作っていました。でも運転運転。それでも作り続け、色々なコンペティションに応募し続けました。ひたすら本を読み、独学で学び続けたのです。出品しても落選、出品しても落選、という状況でしたが、「好きなことをやっているのだから」という思いが強かったためか、その状況に負けることはなかったですね。

S.T.E.P.22:
その後水谷さんは、多くのコンテストで数々の賞を受賞されました。水谷さんの生活にも変化はありましたか？

水谷氏:
そうですね。デザインの世界で評価されるようになり、実際たくさんの自分の作品を残すことができてきました。その頃は、皆さんも知っているかもしれないけれど、ウイダーンゼリーのパッケージを筆頭とにかくパッケージばかり作っていました。同時に、フリーランスですべてやっていたおかげで、お金が入ってきていかなかったのも事実です。代理店も幾つもの僕のことを待っていました。自分自身に脳が乗っていた時期、バブルの時代が重なっていて、いくら仕事をしてもお金が入ってきませんでした。もうお金はいらない、っていうくらい仕事をしていましたからね。
でも、そうなる、今度はもう欲がわからなくなって、困ってしまったのです。ふと、お金はあるけれど、どこか満たされていない自分が空しくなって、それよりも、自分のしたいこと、自分がやるべきことは何だろう、って考えたのです。僕がやりたかったのは、メッセージを伝えることだし、世の中を何とかすることだし、だからどうしてもパッケージのデザインだけではなく、メッセージ性を持つポスターをやりたい、と強く思ったのです。それで、バブル期の最高潮だったというのに、事務所を働いていた僕に全員辞めてもらって、僕も自分のやりたい仕事だけやることにしたのです。

安定と自由、そしてMリープロジェクト立ち上げへ

S.T.E.P.22:
学生の頃、水谷さんは「安定」と「自由」、という選択肢を与えられたとき、「自由」の道を選びました。今回も、安定した収入と、仕事の発注がある中で、「自分のやりたいこと」を再確認するために、それらの仕事を手放されました。大半の人は「安定」への道を選び、自由に生きていくことで、失敗をしたらどうしよう、不安に思うこともあると思います。その点について水谷さんは、どう考えですか。

水谷氏:
そうですね。でも三つ子の魂百までなんですよ。好きこそ物の上手なれ、好きな事をやるのは幸せだし、そのためだったら多少失敗してもいいし、好きな事で失敗するなら本望だし、やはり僕は好きな事をやっていてよかったなあと、思うし、それはすべて学生時代に学んだことですね。好きな事、夢中になれること、そして最終的に自分が楽しめること、を社会に提案すれば受け入れられる。10年もやれば、神様もほっておかないだろうという手ごたえを学生時代に感じたのです。それからは、「失敗したらどうしよう」ということではなく、「自分が何をやりたいか」を考えて生きられるようになります。

もともと「平和や環境」を訴えるポスターを作ったり、地震後の神戸復興のために「がんばろう神戸」のポスターを作ったり、日本の文化を海外に伝えるポスターを作ったり、本当はそういう社会的な仕事しかかったはずなのに、なんでこんな商業美術のバブルに巻き込まれているのだろう、芸者をやっている場合ではないのだ、という自分の中の葛藤があったのです。それで、一番なかった仕事を思い出し、やり始めたら段々と元気がなくなってきて、好きな事をしているのが一番大事なんだなあ、それをできることが一番幸せなんだ、ということがわかったのです。だから「自由」が大切です。

S.T.E.P.22:
その結果、たどり着かれたのが、現在取り組まれているMerry(楽しい・幸せ)Projectということでしょうか？

水谷氏:
そうですね。これまで数々のデザインをしてきましたが、21世紀に向かっての、新しいグラフィックデザインがあるのではないかと考えたのです。これまでクリエイティブ、クリエイティブで作ってきたけれど、一番必要なメッセージ、とか、コミュニケーションの時代という部分が見えなくなってしまっていると思います。僕は、21世紀は「コミュニケーションの時代」だと思っているので、もっと学生時代に感じたことや、世の中を良くするのだ、というロマンを、いよいよ実現しなければ、と思ったのです。それで、MerryProjectをやる決意をしたのです。やはり21世紀は笑顔かなあと、思っています。「笑顔のコミュニケーション」が一番大事だと思っています。

Mリープロジェクトとは

S.T.E.P.22:
具体的にどのような活動をされているのでしょうか。

水谷氏:
最初に開催したのは原宿のラフォーレ全館でやった展覧会です。笑顔の写真と、「あなたにとってmerryとはなんですか」という質問の答えをあわせて、会場、美術館からエントランス、トイレの中まで、笑顔の写真で飾ったのです。こうした展覧会をやることは僕にとって長年の夢だったから、本当にうれしかったですね。本当に、不思議なことになるので、このラフォーレの展覧会のように僕が3年前や5年前に思うことが、ふと実現するということがよく起こるのです。もちろん、運転運転の中、フツフツとつかむという、その努力は必要だし、それに見合うだけのモチベーションももちろん沢山あった。こうしてお話している、常にプラスだけに思われてしまうけれど、それと同じくらいマイナスと、挫折がありがたし、それもしら、プラス以上のマイナスも入れない…。たやすいのがないけれど、「笑顔」は絆糸曲線を結ぶ上でとても大事なポイントだし、単なる形のいい笑顔ではなく、これまで仕事をしながら悩み、考えてきた結果の「笑顔」なので、他にどんな真似事が出てきても、一線を画しているものだと思っています。

S.T.E.P.22:
その後、震災後の神戸や、テロの被害を受けたNYでも、MerryProjectを開催されましたが、それはどのような理由からなのでしょうか。

水谷氏:
活動を続ける中で、カルチャーやアートという枠だけではなく、マイナスなこと、負の遺産、に対して、このMerryProjectをやることによって街がエンターテイメントな街に変わってほしい、と思ったのです。学生のときに保守的なものを革新的なものに変えよう、と思ってのことと同じですね。それで神戸という街を、新しい街、「Merryな街」にしようという中で、震災の後、開催したのです。行政も巻き込んで…。その後、あの悲劇が911後のNYでも繰り返されました。そのとき、このMerryの主旨(コンセプト)を説明すると、「NYでもそういうことをやる人がなんていなかったわ。東京という遠いところから来て、僕いわねえ。もちろん協力するわ」といって、ほとんどの人、99%の人が笑顔の撮影をすることに協力してくれましたよ。あのつらい状況下にあった人たち、心からの笑顔を見せてくれたのです。そう考えると、東京の方がこのMerryやるのは難しかったですね。

S.T.E.P.22:
震災後の神戸でもNYと同様にMerryへの理解はあったのでしょうか？

水谷氏:
そうですね。何千人の人が亡くなった神戸で開催したときの写真を思い起こしても、負の遺産の影響を受けた人というのは、やはり物事をよく考えて、影のあるところが強い光が当たる。だから、当時実感したことなのですが、光が当たれば影ができ、影のあるところが強い光が当たる。だから、マイナスの影を知る人は、強い光もすぐに理解できるのです。だから強い光もよくわかる。なぜ神戸やNYでやったのかというと、強い影を知ったために、強い光を感じるということが、その結果、強い力で笑顔、本当の意味を持って笑ったに出会えたのではないかと考えています。NYを訪問した時期も、まだ非常に複雑な時期でした。しかしアメリカの人って真に対して立ち向かっていく強さを感じましたね。人間持つ復元力の強さ、これは人間が持つ真の美しさだと思うのです。

S.T.E.P.22:
こうした活動は、すべて水谷さん御自身の資金もともに、行われているのですか？

水谷氏:
はい、NYの場合もどこにも請求することなく、すべて持ち出し持ち出しでやりました。基本的にはこの活動で儲けるという考えはなかったですね。今、事務所にはスタッフもいますし、事務所の維持費や活動資金も得なければならぬ。でもMerryプロジェクトではなかなかお金を生むことは難しい。そこまではまだ辿り着いていないのです。だから、本来のデザインの仕事で資金を得つつ、活動している。それが現実ですね。ところが、続いていると、それに対して見ている人が必ずいて、「少しずつお金を集めてくるから、Merryの基金を作ってください」という声があったのです。ちゃんとやっていると、ここからの時代、それを何とかしようという企業や個人が本当に現れてくるのです。このころ、MerryProjectと同じく重点的に取り組み始めたゴミ拾いプロジェクトに対して、お金をなんとかしてあげよう、という人たちも現れて、地元の町内会長さんがTシャツを作ってくれたり、差し入れしてくれたり、してくるのです。

水谷さんの原動力そして夢

S.T.E.P.22:
Merryの活動は、すべて水谷さん御自身の資金もともに、行われているのですか？

水谷氏:
そうですね。Merryというのは次の時代に向かっての実験だと思っています。コアボレイト・コミュニケーションとか、コミュニティのプロジェクトだと思ってもいい。コアボレイト・コミュニケーションとか、社会貢献なのか、その位置付けなのかわからない。でもこのMerryこそが新しい時代の提案になるのかなと確信しているのです。これからは、こうした活動が、企業や社会を巻き込んで、行われるべきだと思っているので、まさにコアボレイトを持って活動したいと思っています。今、大変な思いをしてこの活動していますが、何年後、何十年後かに必ず花を開くと、思っているのです。僕は相変わらず、何をやるのも一直線ではないので、お金もない、こんなことばかり続けていいのだろうか、何でこんな事をやっているのだろうと思うこともあります。企業も周りも味方ばかりではないし、日々迷走を繰り返しているけれど、Merryをやった後は本当にいい気持ちになるのです。だからこうしてコツコツやっていると、必ず花は開くと信じています。ただ、やり続けるか、やり続けるか、ということが一番重要なことなのだと思います。そうしたい思いがあったら、活動を継続できているのかもしれないですね。

S.T.E.P.22:
Merryの活動を通して、日本の社会をどう変えていらっしゃいますか？

水谷氏:
まず思うことは、世の中がこうした新しい動きにつれてきていないのでは、ということです。そもそも企業からこうした活動に寄付をもらおうとすると、まず企業の中で審査が非常に厳しい。やはり企業から、協賛するには、それなりのメリットがあるから企業側にはOKはでない。特に、こうした活動に協賛してほしい、という団体が複数出てくるので、Merryを自分で選出するもの困難だと思ってしまう。しかし時代は社会貢献の時代へと移っています。だから企業自体も実は過渡期にあるのだと思っています。いろいろな広告に使うから、商品が売れるのではなくて、いい社会貢献をしている「良い企業」だから、その企業の「良い商品」を買いたい、思考の変換ができるようになるかなあと、思っています。

S.T.E.P.22:
水谷さんの今後の目標や、夢をお聞かせください。

水谷氏:
そうですね。僕はこうした活動を続ける中で、やはりリアリティが大切だと思っています。だからこそ、身近なところからはじめて、身の丈で進めていく。当初は、イラコの復興支援とか、アフガニスタンの問題を解決するとか、そうした問題についてこれから始めていく、それが広がりにつけたい、なあと、今私が確信する意志を貫いていっているのも、こうした回り道のおかげだと思っています。

S.T.E.P.22:
最後に、このインタビューを読んだ方々へメッセージをお願いします。

水谷氏:
すべての事情は回り回っています。様々な局面で色々な事を試し、普通だったらまっすぐできる好きな、私時間があったら、一回通してしまってもいいじゃないか。でもその回り道の間に、自分の好きなこと、大切なこと、確固たる自信をもてるようになってきたのは事実です。無駄なことなど、どこにも無いことを確認しています。現に、回り道をしてやってきたことというものは、とても良かった。これがないと、私も、挫折してしまかもしれません。もっと弱い自分になっていたかもしれないですね。今私が確信する意志を貫いていっているのも、こうした回り道のおかげだと思っています。

大変な事を良い事というのは、渡打ってくるので、あらかじめ決めていくと、必ずいいことがあるのだと僕は思っています。「果して行くと、それなり結果しか訪れないし、必ずずれば、楽しい事もいっしょにやってくるかな」という意味です。そういう意味では、今はまさに過渡期で、何がよく何が悪いのかわからなくなっている時代ですね。何が成功して、何が将来的にうまくいくかわからないのだけれど、とにかく自分を信じて、自分に打ち勝つて、自分の才能に自信を持って、自分の好きな事、やりたいことをやっていけばいいのではないかと、僕は思っています。がんばって下さい。